

交配からトリス入産の出来立ちまで

木所 薫

私の愛犬ラムは、室内で飼育と言いか私と同居致して居りますためか、三才（人間で言えば三十才前後でしょうか）にもかかわらず、「まるで少女のまま」と言った感じで、これも恥しながら一つの布団を共にしているためか、私以外は何ものも目に入らない始末でした。私にとっては涙が出るほど嬉しく、又、多々都合の良いことがあるのですが、親の立場で考えますと、やはり犬生に目覚めさせてやらねばいけない！と、かねがね心に思っていて居りました。ラムを初めて手にした時から、いずれはこの子も母にしてやりたいと思っていた事もあるって、いざ！交配！となりました。交配当日は、手塩にかけて育てた我が子を（人間の子はまだおりませんが・・）奪われる様な、しかし、又、嬉しい様な、あのなんとも複雑な気持ちは今も忘れられません。しかし、交配を済ませた帰り道、彼女はなんと一ク寂しげで、別れてきた彼を思っている様な面持ちでした。さて、交配後、懐妊したことが外視的に分かるのは一か月程で、実際に胎児が際たって発育するのもその後になります。従って、それまでは運動も平常通りで良いのですが、同じ屋根の下で共に暮らして居りますと、とかく気になり、交配の翌日から、なるだけ飛び跳ねたりしない様にしたり、階段から飛び降りようものな

ら「大事な女なんだから」と叱ったりして、本人は「何かいつもと違うナー・・・」とボケツとしておりました。

前回のシーズンにも交配を試みたのですが、多分、交配日が早過ぎたための様でしたが、懐妊ならず今回こそはと、多大な期待が有った為か懐妊確定迄の一か月が、何と不安で長かった事か。そして、一か月少し経った頃にはお腹はぼっこりして参りまして、ホツと一息・・・入れたのも束の間で、一日一日と日が経つに従って、限りなくフタになって行く姿（毛色が淡いイエローなだけに）の彼女を見守るのにどれほど神経をすり減らした事か分かりませんでした。

ラブドールレトリバー種以外の犬種を交配させた事がないので、何とも言えませんが、この頃になりますと、やはり一日一日産部が大きくなり、出産一週間ほど前になると、氷囊にいつぱいの氷を入れた様な感じになり、内臓が出てしまったのではないかと心配しましたが、これは出産時に初生児を保護するクツシヨンの役目をするとの事でした。散歩の時などはいささか邪魔で、ぼろりと落としてしまいそうに歩いて居りました。私が小学生の頃、雑種の妊娠・出産を経験しましたが、この様な姿は覚えておりません。

レトリバー種は一般に多産と言われている様ですが、彼女もまさにその通りでした。予想としては六匹から八匹だったので、現実はいささかあらず！初産にして「十一匹ワンちゃん大行進」でした。

出産一週間前の姿は見るも哀れな姿で、彼女としても初めての体験で、なぜこうなったのか、これからどうなるのか、全く見当も付かなかつたのでしよう、とにかく目を白黒させて居た様です。側から見ても足は口口口口、息は荒く、階段を降りる時などは、口から仔犬が産まれそうな様子でした。そして、出産二・三日前には「もうだめ！産まれちゃう！」と言う様なそぶりをするので、私自身も出産の経験はないし、おろおろしてしまいました。そんな私を見て、的確な助言をしてくれたのは母でした。思えば、これからどうなるのかを知っているのは、わが家では母一人だけだったので、いよいよ出産一日前のこと、ラムの時々発する悲痛な声にほだされて、まる一日産室にとじこもり、今か今かとお腹を擦りながら待ち受けて居りましたが、その日はむなしく空振り、翌日も同じく・・かなア・・と、思いまや、昨日とは違つて彼女のいきみ方を見て、「アツこれだ！」と思つている内に、遂に始まったのです！初出産が。

第一子が産まれ落ち、ラムはとにかく自分で始末しなければと思つたのでしよう。とりあえず総てをなめ尽くし、そして、後に残つた、動く、暖かいものを見て、一瞬「なに？これ」と言う様な目で見ていました。何しろ十一匹ですので、初めの五匹程は一時間以内で、ボロボロと産まれ落ち、その後徐々に一頭ずつ産まれ出る間隔が長くなっていました。その、フツと時間が空いて、仔犬たちが自分の乳を捜して、シーシー言っているのを見ている時に彼女は「これは自分を必要としている同じ動物なのだナ」

と、気付いた様でした。やがて、八・九匹目が産まれると、私はやっと終わりだと思ひお友達に電話を掛けて、喜びと衝動的な感動を伝えたりして、お産を切り上げる用意をして、気を抜いていると、またもや陣痛が始まり、出産が始まりました。初めの出産からこれ八時間は経っていたと思ひますが、彼女の疲労も大きく、いきんではいるのですがなかなか産み落とせず、私は仔犬が胎内で水を飲んでしまう事を恐れて、やむなく彼女のいきみに合わせて、両手で、お腹の子を下げるべく、両手で押しあげることになりました。それが良かったのか一頭も欠けることもなく、無事に誕生したのでした。

何と彼女は、約一日仔犬を産み続けて居たことになりました。その間彼女はこれも初体験のためか「いきみイコール排便」という本能のためでしょうか、三回程産室を出てトイレで出産しようとした時は慌ててしまいました。そして、総てを産み終え、しばらくして彼女が立ち上がった時初めて気が付いたのですが、何と彼女のやせ細っていたことでしょうか。その時の写真が今も有りますが、まるで別の犬の様です。

めでたくお産は完了し万事OK、後は母犬さんに任せておけば良からうと思つたのは大きな誤算でした。初乳はどの子にも吸わせたものの、彼女の乳は殆ど出ないに等しく、その上、出産翌日、彼女は乳腺炎をおこし、それが手戻つたためか産褥熱が下がらず、危うく一命をとりとめたのでした。仔犬たちも一日一日痩せていくのが分かりました。これにはさすがの私の母も肝を冷やしたの

でしょうが、そこは経験者、まごまごしている私をものともせず補乳を始めました。しかし、いかに母といつても十一頭の乳を一日に何回となく平均に与えるのには、いささか参った様です。母の話しによりますと乳腺炎というのは、それはそれは痛いそうで、髪の毛が触れただけでも飛び上がる程だそうです。ラムの場合十個ある乳のうち一つだけが炎症をおこしたのですが、結局、臍が溜り破裂してしまい、その穴は子どももの握りこぶしがすっぽり入る程の大きさで、歩くたびにバカバカしていました。乳が出ないと言つても、仔犬たちは無心に母の乳を求めるので、薬を付けることも出来ず、手のほどこししょうは無かったのですが、生命力の強さというか、仔犬が巣立つ頃にはすっかり穴は塞がり、一年経つた今は、その跡は何も残つて居りません。

通常の授乳期は、（これはまさに私と母の連携プレーで）何とか持ちこし、次は、これ又苦勞の離乳食！なにしろ何をやるにも十匹が一度にドツと押し寄せ、無論排便も十匹分、やはり母親が幼児性が抜けていないためか、仔犬の面倒はあまり見たがらず、排便の始末もこの頃になると自分で処理するのではなく、土もないの、鼻で土を掛けるふりをして隠そうとするか、見て見ぬふりを決め込んでいます。そして、仔犬たちに小さな歯が生え始めると、乳を求めて押し寄せる仔犬の波間を逃げ回つておりまですし、仔犬たちの食事を隙あらば横取りしようと狙っている始末でした。私の家にはラブの他に牡のチワワ（名前はアタル君）が同居しているのですが、小さいながらもラムを彼女と思つて

らしく、すっかり父親気分になり自分のご飯をまだ歩けもしない仔犬たちの前に、ぼとりと置いて、与えていくのには驚きました。父親（氣取りのニセ父親）も父親なら、母親も母親で、まだ離乳してない仔犬に自分が貰つた食べ物をなにかにかまわず与えてしまふのです。ある日、ラムが二階にある産室に行く足音がしたのでフト行つて見ると、何と五十センチ程もあるだし昆布を、仔犬たちがかじっているのです。それは買物から帰つた母が（ラムは外出から戻つた人に物をねだる癖があるので）とりあえず、だし昆布を持たせたところ、それを与えてしまつたのです。その他にも、財布・ボールなど、とにかく人に貰つた物を、かまわず仔犬に与えてしまふのは困りました。

産室と言うのは、実は私の寝室で、布団を一枚敷けるスペースを残し、板で仕切りをして、下にダイニング用の厚いビニールを敷きつめ、仔犬たちに提供した訳ですが、ヨチヨチ歩きの内は三十センチ程の高さの板で、良かったのですが（これで済むと思つたのは浅はかでした・・・）、跳ね回る様になり、食事の時間になるものなら、九十センチ程の仕切りなど物ともせず乗り越えてしまふのです。そして、何か（私の）顔の辺りに異常を感じ、朝目覚めた時には、時既に遅く、私はチビたちのオシッコともう一つの物にまみれているのです。情けなくも生みの親は、そんな育ての親を、横目で眺め知らぬ顔をしているのでした。しかし、あの無邪気な天使たちのする事は、何ものにも換えがたいのです。どんなにクサイ思いをしても、あの愛くるしさには負けてしまい、

彼らが一山になって寝ている中に入って、ボケツと時を過ごすのが日課になってしまいました。先程から十四と述べていますが、今回の最大の悲しみですが、私のほんの一瞬のミスによって一つの命を失ってしまったのです。生後三日目程の補乳をしている時、乳児を育てた経験のない私は、ミルクの出方が多過ぎ、鼻に詰まり苦しがつている子を見て、思わず仔犬の鼻から息を吸ったり吐いたりしてしまったのです。この時決して息を吹き込んではいなかったのですが、結局、多量のミルクが肺に回り肺炎をさせてしまったのです。獣医師にも手の施し様がなく、わずか三・四日の命でした。今も思い出す度に胸を締め付けられる思いがいたします。

今にして思えばラムのミルクが出なかったのは、精神的な影響も大きかったのではないでしょう。ただでさえ箱入り育ちの上には、十一匹の多産、そして乳腺炎、発熱と悪条件が揃ってしまったのです。現に一頭だけ生後二か月以後も母親のそばに残った子が居たのですが、もう完全に離乳する頃になってやっとミルクが出始め、その子は一箱母乳を多く貰い、その頃には乳腺炎の穴もすっかり塞がっていましたので、あまり乳を吸わせることも嫌がっていませんでした。その子の世話も長く見て居りました。その子が巣立って行く時、さすがに母親は不安な面持ちでしたが、そこは箱入り娘の特権か、翌日にはすっかり悲しみはきえうせ、むしろ、やっと私がラム一人のものになった喜びの方が大きかった様です。

第一の私の目的であった、ラムの犬生についてはほぼ私の期待通りになった様です。以前迄は、ただ優しくボーツとしたお嬢様だった子が、犬としての警戒心や母性本能を身に付け、大同志の孔儀やおきて等も備わって来た様で、その他、物事に対する興味を示し方や、身のこなし、体質も良い方へ変化した様です。

仔犬たちが巣立って行く迄は約二か月でした。が、今にして思うとアツと言つ間の様でもあり、二年分の苦勞をした様に、永かった様でもありました。事実、母体の体力作りの期間も入れると、約半年間は追われていたのですが、こんな苦勞も私には何となく癖になりそうなきがします。

